

## 編集後記



新緑（写真提供：山崎和彦氏）

本号では、最近の計算科学の動向について関係分野の専門家にご報告頂くとともに、気候システムのモデル研究等で著名な東京大学の住教授に誠に含蓄の深い巻頭言を頂きました。また、日本エネルギー経済研究所の伊藤常務理事からは、アジアを中心とした世界の長期エネルギー需給展望に関する最近の分析結果をご紹介頂きました。皆様から原稿を予定どおりご提出頂き、順調に刊行に至りました。ご協力頂いた方々に深く御礼を申し上げます。

今年はいよいよ京都議定書元年。気候変動問題も対策が待ったなしの状況になりました。科学的に未解明の部分も多いようですが、地球が急速に温暖化していることはもはや疑いようのない事実です。そして、その主たる原因が人間活動の急速な拡大にあることも……。さらに、人類の営みが「瑠璃色の地球」に取り返しのつかない致

命的な影響を与える可能性さえも指摘されています。緑が鮮やかな季節が巡ってきましたが、この当たり前の自然環境を守り続けることが決して簡単でないことが分かってきたのです。

最近、「激変」という言葉が日常的になるほど、急速に、かつ大きく変化する時代を迎えています。例えば、20世紀さえもまだのどかな変化の時代だったのかも知れません。「持続可能な開発」への模索は続けられていますが、「日暮れて道遠し」の感です。

こうした歴史の激流の中で私たちができることは限られており、流れにただ身を任せるしか術がないようにも感じられます。しかし、明日を読めない時代だからこそ、また、社会が複雑になったからこそ、私たちの進むべき途を探るための羅針盤として、計算科学が果たすべき役割が大きくなりつつあることもまた確かであると思います。（佐藤）